令和5年度

「少年の主張大分県大会」
発表記録集

大分県青少年育成県民会議
国立青少年教育振興機構
大　　分　　県
大分県教育委員会

はじめに

昭和五十四年、国際児童年を記念してスタートした「少年の主張」は、中学生が広い視野を養い、物事を論理的に考える力を身につけることを目的に開催され、今年で第四十五回を数えます。今年も県下の中学校二十三校から千四百八十七作品もの応募があり、テーマも自らの挑戦や葛藤、家庭での出来事などの身近なことから、人権や環境などの社会的な課題まで多岐にわたる内容でした。

八月三十一日にくすまちメルサンホールで開催された大分県大会では、約五百人の観客が見つめる張り詰めた空気の中、一次審査及び二次審査を経て選ばれた十人が堂々と主張し、少年・少女らしい飾り気のない言葉に心からの思いや未来への提案が詰まっていました。

最優秀賞に選ばれた平井さくらさん（玖珠町立くす星翔中学校）は、その後の九州ブロックでの審査で努力賞を受賞するとともに、大分県青少年健全育成大会では百三十人の参加者の前で力強く発表し、大きな拍手が送られました。

この発表記録集には、県大会に出場した十人の作品と全国大会での内閣総理大臣賞受賞作品を収録しています。多くの皆様にご覧いただき、青少年に対する理解を深めていただくとともに、今後、健全育成に取り組まれる上での参考にしていただければ幸いです。

結びに、本大会を開催するにあたり、ご支援、ご協力をいただきました玖珠町をはじめ、玖珠町教育委員会、各中学校関係者、その他関係の皆様方に、心からお礼を申し上げます。

令和五年十二月

大分県青少年育成県民会議
会　長　佐藤　樹一郎

目次

〈県大会発表作品〉

最優秀賞
「好きなことにまっすぐに」……4
平井　さくら　玖珠町立くす星翔中学校三年

優秀賞
「当たり前」は「当たり前」？……6
今口　花怜　竹田市立竹田中学校三年

優秀賞
その一粒に感謝を込めて……8
北口　愛　別府市立北部中学校三年

優良賞・大分県教育長賞
言葉の力……10
前田　葵衣　宇佐市立長洲中学校三年

優良賞・共感賞
Ｂｅ　ｍｙｓｅｌｆ……12
佐藤　有咲　臼杵市立南中学校三年

優良賞
嫌われ者……14
安東　セア　宇佐市立宇佐中学校二年

優良賞
「人によって態度を変える」……16
伊藤　凛　別府市立別府西中学校三年

優良賞
後悔するか、挑戦するか……18
黒木　心晴　大分県立大分豊府中学校三年

優良賞
「継がれる命」……20
髙橋　遼　九重町立ここのえ緑陽中学校二年

優良賞
「ありがとう」と伝えたくて……22
山村　隆文　竹田市立緑ヶ丘中学校三年

〈全国大会発表作品〉

内閣総理大臣賞
私が歩む夢への道……24
矢曳　未来　鳥取県米子市立東山中学校三年

講評……26
佳作入選作品……29
大会のようす……30
実施要綱……32
審査基準……34
選考経過……36

（大会発表の作品は、原文の誤字・脱字の修正以外は、そのまま文字にして掲載しました。）

最優秀賞

「好きなことにまっすぐに」

玖珠町立くす星翔中学校
三年　平　井　さくら

舞台に立つからこそ感じられる、照明を一身に浴びたときの気持ち、お客さんから感じる私への視線、舞台の上から見える景色、そんな光景や気持ちに魅せられて、私は舞台に立ち続けています。

私は小学校五年生からミュージカルを習っていて、毎年三月、公演という名の発表会に挑んでいます。

今年の演目は、「日本初の少女車掌物語」。この物語は玖珠町出身の「村上あやめ」さんの生涯をミュージカルにしたものです。

私はずっと演じてみたかった主役、村上あやめさん役をやっとの思いで得ることができました。

しかし、今回は一日に二公演。ダブルキャストでもう一人同じ役の人がいました。

彼女は私よりもミュージカルの経験も豊富でダンスもうまく、私にとっては大きなプレッシャーです。

ハードな練習が続く中、支えてくれたのは私の弟でした。弟は私の変化にすぐに気がつきます。うまくいかなかった日、私は帰りの車の中でばれないように泣いていました。すると「俺も今日うまくいかんやった。でも姉ちゃんは、あそこよかったよね。」と言ってくれるのです。

今思えば私がミュージカルを始めたのも一歳年下の弟がきっかけです。負けたくないと思って頑張ってこられたのも弟の存在。うまくいかなかったとき励まし合うのも弟。

弟はやると決めたらとことんやって、人が見ていないところでも努力する、私のよきライバルでもあり、憧れでもあります。

そして、もう一人の私を支えてくれた存在、それは私が演じた「村上あやめ」さんでした。

村上あやめさんは、日本で初めて女性でバスの車掌になった人です。女性の立場が社会的に低かった当時、村上さんの苦労は並大抵ではありません。しかし、自分の信じた道を他人からどう言われようとひたすら努力して歩みを進めたあやめさん。そんな彼女を演じる中で、私は自分とあやめさんとを重ね合わせていました。

ソロで歌うとき、私はあやめさんと自分への思いをその一瞬に込めます。

スポットライトが当たり、客席全体が見える。
一人ひとりの視線が私に集まる。
「夜明けの海に日が昇り
希望の鐘がなりひびく
なみだをふいて走り出そう」
私は村上あやめ。
どんな辛いことがあっても、
他人から何と言われても
最後まであきらめず努力する。

そんな私を見てください。

あやめさんを演じることを通して、引っ込み思案だった私自身が変わった瞬間でした。

公演当日、思うようにいかなかった部分も含めて、あの時の自分にできる最大限の力を出せました。

初めて泣くほど緊張するということを経験し、どれが正解かわからずスランプに陥り、もうやめたいとさえ思ったりと、本当に様々な経験をしました。

しかし、これら全てがミュージカルを通して自分自身を変えるかけがえのない経験となりました。

今、また新しい公演に向けてオーディションが始まりました。

私はやっぱりミュージカルが好きです。舞台に立った人にしか感じられないあの感じが好きです。そして、舞台に立っている自分が大好きです。

これからも好きなことにまっすぐに取り組んでいきます。

優秀賞

「当たり前」は「当たり前」？

竹田市立竹田中学校
三年　今口花怜

「アッパ、おはよう。」
私の朝は父に対するこの挨拶で始まります。先に起きてご飯を食べている父。父も
「おはよう。」
と返してくれます。父は右手で箸を、左手でスマホを持っていて、ご飯を食べながらスマホの画面を見ています。食器はテーブルの上に置いたままです。
夜は、母の作ったご飯を食べます。おかずの味付けはたいていごま油やニンニクです。みんなが食べ終わると、母が
「花怜、ソルコジしといてくれる。」
と声をかけてきます。返事をして、食器を洗いに行きます。全部終わったら勉強したり、スマホを見たりして過ごします。姉と話すこともあります。アイドルの話題になると二人とも気分が高まって、
「キョウォ」
と叫びます。その後、布団に入ります。これが私の家での様子です。皆さんは違和感を感じませんでしたか。
「アッパ」「ソルコジ」この言葉を聞いたことがありますか。食事中、左手で食器を持たない。おかずの味付けはごま油やニンニク。あなたの家と同じですか。
私の父は韓国人です。母は日本人で、私はいわゆる「ハーフ」です。家の中では韓国と日本の文化が入り混じっています。「アッパ」は「お父さん」、「ソルコジ」は「食器洗い」、「キョウォ」は「かわいい」を意味する韓国語です。私たち家族は日常的に韓国語を使っています。他にも、食事のマナーが違ったり、トッポギなどの韓国の食べ物が食卓に並んだり、韓国風のものや習慣がたくさんあります。そして、私の家ではお正月や子供の日、七夕などの日本の行事も楽しみます。
私の家は周りと違うな、と最初に感じたのは小学校一年の時です。給食の時に、私は父と同じように左手を机の上に置いて体を支え、食器を持たずに食べていました。すると、先生に、
「左手でお皿を持って食べて。」
と言われたのです。はっとして、慌てて皿を持ちました。あれほど、家では母に皿を持って食べるようにと言われていたのに……。しかし、いつも父が左手を使っていないので、つい同じような姿勢で食べてしまっていたのです。私の家での当たり前は他の人の当たり前ではないのかもしれないと気づいたのはその時でした。父の食事の様子を見ると、えっと驚くかもしれません。正直言って、「行儀が悪い、マナー違反だ。」とまで思う人もいるかもしれません。しかし、父の祖国である韓国では「左手で食器を持たない」というのが食事のマナーなのです。
小学校一年生の私は、先生に皿の持ち方を注意されて恥ずかしいと思いました。その癖を早く直さなければ、とも。しかし、今振り返ると、それは少し違うのではないかと思っています。「左手で食器を持たない」ということは、父の国の文化、習慣であり、父はその姿勢を貫き通しました。堂々とした生き方を目の当たりにし、私も、その習慣に誇りを持つようになったからです。
この世界にはたくさんの国と文化があります。生まれ育ったところから離れると、自分の「当たり前」は「当たり前」ではなくなるかもしれません。違いがあると、人はその人を批判したり、反感を抱いたり、避けたりします。しかし、自分がそうされたら、悲しさや悔しさを感じることでしょう。「違い」とは多様性だと思います。違いを認め合えば、みんな笑顔で生きていけるのではないでしょうか。だから、私は違いを感じた時は、その人と話をして、理由を考えたいです。その人自身を、そして、その人を取り巻く環境や文化を知ることが大切だと思います。
私は今も左手で食器を持つように心がけています。そうしないと、つい食器を置いたまま食べてしまうからです。ここにいる以上は、この国の習慣に合わせた方がいいと思っています。しかし、一つの国の習慣にとらわれたくないという思いもあります。だから、私は世界には様々な文化や習慣があることを知ってもらいたいと思います。機会を見つけ、手段を考え、それを発信していきたいと考えています。自分の「当たり前」は「当たり前」ではないかもしれないということを、私自身いつも忘れないようにしたいです。
最後に聞きます。
あなたの「当たり前」は本当に「当たり前」ですか。

優秀賞

その一粒に感謝を込めて

別府市立北部中学校
三年　北　口　　愛

「食品ロス」これは、まだ食べられるはずの食品を捨ててしまうことです。日本は食品ロス大国です。日本の年間の食品ロスの量はおよそ六百万トン。これは、国民全員が毎日茶碗一杯分の食べ物を捨てている計算になります。

私は、幼い頃から祖母に、

「世界ではあなたと同じぐらいの歳の子がね。ご飯を食べられずに苦しい思いをしているんだよ。だから、残さず食べなきゃいけないんだよ。」

と教えられてきました。私はそのとき、その言葉の意味を理解したつもりでいましたが、中学生になって実際に調べてみると、想像していたよりずっとひどく、過酷な状況にあることを知りました。例えば、アフガニスタンに住むある九人の家族は、毎日たった一枚の食パンを九人で分け合っています。また、人が捨てたゴミの山をあさって食べ物を探す、私よりずっと幼い子の存在も知りました。その子の夢は、「お腹いっぱい食べてみること」だそうです。あまりにもひどく辛い状況に、私は胸を締めつけられるばかりでした。飢餓に苦しむ人は、世界に七億人存在します。

そんな現状を知った私は、日に日に怒りを覚えるようになりました。特に学校の給食は、つい最近まで完食するのは珍しく、毎日大量に残されていました。「なぜみんな平気でいられるの？」と、心の中でいつも思っていました。しかし、行動を起こす勇気はありませんでした。バカにされるのを恐れていました。見て見ぬふりをしてしまっていました。

ある日、給食でえだまめコーンが出て、それが食缶の半分ぐらい残りました。私もおかわりをしましたが、食べきることができませんでした。残っている様子を何食わぬ顔で見ているクラスメイトを見て、これはいけない、私がこの状況を変えなければと思い、行動しようと決心しました。勇気をふりしぼり、全校生徒に今の世界の現状と、私の思いを放送で伝えました。そして毎朝、正門の前で食品ロス０のポスターを掲げて呼びかけを行いました。すると、以前までは毎日全校一人あたりおにぎり二個分の給食が残されていましたが、活動以降、一人あたりおにぎり一個分にまで減らすことができました。私は自分の力で学校を変えることができたのです。しかし、それを実現できたのは私一人の力ではなく、全校生徒一人一人の協力があったからです。

だから、今ここにいる私たち、そして世界の人たち一人一人が食品ロスへの意識を高め、行動することができれば、必ず食品ロスはなくせます。私は今回、そのことを証明することができました。この問題は、誰かが解決するのではありません。私が、あなたが、解決するのです。だから、人任せにしたり、見て見ぬふりをしたりするのは、もうやめましょう。私たちに今できることはたくさんあります。例えば、賞味期限の近いものから買ったり、必要な分だけを買ったり、捨てる部分をなるべく小さくするなどです。その日々の小さな努力があれば、必ず解決へ導いていくことができます。そして、この問題を解決できれば、その分廃棄した食料を燃やす必要もなくなるため、環境負荷を小さくしたり、またより多くの食料を世界中の人々に届けることができます。食品ロスをなくしていくということは、世界中の人々を幸せにできるということです。私の夢は、世界中の飢餓で苦しむ人たちを笑顔にすることです。だから、世界中の人々の幸せのために、これからも私は訴え続けます。

優良賞
大分県教育長賞

言葉の力

宇佐市立長洲中学校
三年　前田葵衣

「私は君に生きていてほしいけどね。」

この言葉を聞いた瞬間、私の頬には涙がとめどなく流れ出した。

私は五年前、両親に連れられていった病院で発達障害だと伝えられた。その言葉の意味が始めのうちこそ理解できなかった私だが、今ではそれがどういうことを指すのか、完全に理解できているつもりだ。

私は毎日何かしらやらかしている。物をなくしたり、ケガをしたりすることは日常茶飯事だ。テストの日には、解答欄がずれていて合っているはずのところがゼロ点ということもあった。おっちょこちょいと言うと少しかわいらしく聞こえるが、悪く言えば落ちつきがないのだ。このときの診断を聞いて、私の落ちつきのなさは発達障害によるものだったんだと腑に落ちた。

私が診断を受けてから、両親は変わった。診断される前は、

「なんでできないの!?」

と怒られることがよくあったが、今では私がなにかやらかしたときには、

「また～？流石だね！」

と、呆れてはいるが怒らずにいてくれている。私の特性を認めてくれているのだと感じる。一番の理解者が身近にいてくれるのは、本当にありがたいことだ。

しかし、良いことばかりではない。誰でも一生に一度は経験するであろう、「病み期。」無気力で、ネガティブ思考で、自暴自棄になってしまう気持ちを自分ではどうしようもなくなってしまう状態が、私には人よりも頻繁に訪れてしまうのだ。

その通院日はまさに人生最大の「病み期」の真っ只中だった。色々な出来事が重なって、病みに病んでいた私は、病院で最近の出来事を尋ねられ、思いつく限りの愚痴を吐き、そして先生に言った。

「もう消えてなくなりたい。」と。

そのとき、先生が困った顔をしながら、それでも力強く私に掛けてくれた言葉を私は一生忘れないだろう。

「葵衣ちゃんが消えたら先生悲しいし、私は君に生きていてほしいけどね。」

ハッとした。よく考えると、確かにそうだ。私はそんなこと考えていなかった。私が消えてしまったら、悲しむのは周りのみんなだ。両親はどれだけ悲しむだろう。周りの友達だってきっと悲しむに違いない。こうして話している先生だってそうだ。自分の感情ばかりで、周りの人の気持ちなんて考えていなかった。

どうして、このとき涙があふれたのか自分でもわからない。先生の言葉が嬉しかったのかもしれないし、そんな当たり前のことに今まで気づかなかった自分がふがいなかったのかもしれない。とにかく、この先生の言葉が、私の心に強く、深く響いたのは事実だ。

言葉の力は偉大だ。たった一言で、人を救うこともあれば、追い詰めてしまうこともある。先生のその一言は、私を救ってくれた。それはきっと、先生が私の気持ちに寄り添って発してくれた言葉だったからだと思う。

日常生活で、多くの人は良い言葉より悪い言葉を気にする。ネットなどの中で、直接的な関わりのない相手にも、悪い言葉をかける人もいる。何気なくやっていることかもしれないが、最悪の場合、心を痛め、命を落としてしまう人だっているのだ。

だからこそ、私は言葉の力を信じたい。良い言葉、人を救う言葉を見落とさずにいたい。そして、私自身も、言葉の力を正しく使っていけるよう、相手に対して寄り添う気持ちを忘れないでいたい。先生が私を救ってくれたような言葉を、次は私が誰かにかけられるように。

優良賞
共感賞

Be myself

臼杵市立南中学校
三年　佐藤有咲

「お姉ちゃんと比べないで。」

いつもいつも、私は五歳上の姉にコンプレックスを抱いていた。

私たち姉妹は書道を習っている。私が小学校一年生で習い始めた時、六年生だった姉はたくさんの賞を受賞していた。その頃は単純に「お姉ちゃんってすごいんだなぁ」くらいにしか思っていなかったが、成長するにつれて、それがいかにすごいことなのかを理解できるようになった。新聞や市報に名前が載るたびに、親戚や近所の人が「すごいね、次も頑張ってね」と姉に声をかける。そして決まって私にも「お姉ちゃんみたいに頑張って」と言うのだ。私はその言葉を、素直に応援として受け止めることができなかった。

姉と同じように練習しているつもりでも、うまくいかない。一緒に教室に行っても、できるだけ離れた場所に座って、姉の書く姿が目に入らないようにした。これ以上姉と比較されるのが嫌で、姉が習っていたピアノは習おうとしなかったし、中学校に入学して進路について考えるようになってからも、姉と一緒の高校にだけは進学しないと心に決めていた。

それでも、姉を知っている人は、私に会うと必ず「お姉ちゃんは…」と言う。「私はお姉ちゃんの妹という存在でしかないのか」と、どんどん卑屈になっていった。

しかし、姉はずっと変わらず優しかった。私が「この筆書きにくいなぁ」と言いながら練習している

と、「私はもう一本持っているから、この筆使いよ」と言ってくれた。それはずっと姉が使っていた筆で、とても書きやすかった。そんな姉の優しさと余裕に触れていくうちに、私は、自分だけが姉を過剰に意識しているのがだんだん馬鹿らしくなっていった。

姉へのコンプレックスが少しずつなくなっていくと、姉の書道に向かう真剣な姿に向き合えるようになった。お手本をもらったその日の夜から家で何枚も書く。その作品をお手本に重ね、ずれているところを修正しようとまた書く。そうした地道な練習を黙々と繰り返す。当時の姉と同じ中学生になった今なら、その練習と勉強や部活との両立がいかに大変だったかが分かる。数々の受賞は姉の努力の証だったのだ。私はようやく姉の本当のすごさを理解できた気がした。

私は、自分も何か自分の力で輝きたいと思うようになった。そして、生徒会長に立候補することにした。姉も務めていた役職。今までの私なら、姉と比べられることを恐れ、絶対に避けてきた。しかし、姉の努力を素直に認められた今、私は姉を最高のライバルとして頑張ろうと思えるようになった。

生徒総会、体育大会、日々の委員会活動…。それらを企画・運営していくことは、想像以上に大変だったが、その分達成感や充実感も大きかった。自分が考えたことが形になっていく過程は楽しかった。こんな自分を姉に見てもらいたいとさえ思った。体育大会での「生徒会長の言葉」を聞いた姉が、こう言ってくれた。「こういう経験は、これから先、高校生や大人になってきっと活かされる。良い経験をしたね」と。

今では、社会人となり免許をとった姉の運転で一緒に書道教室に向かう。座る席はもちろん姉の隣だ。姉にアドバイスをもらい、姉に負けじと何枚も練習する。いろんな人からの「お姉ちゃんに似てきたね」という言葉が何だかうれしい。

姉と自分を比べて卑屈になり、殻に閉じこもっていたのは自分自身だった。その殻を破った今、私は「自分は自分」と胸を張れるようになった。これからも私は、姉はもちろん誰とも自分を比較することなく、”Ｂｅ ｍｙｓｅｌｆ“、自分らしく輝いていきたい。

優良賞

嫌われ者

宇佐市立宇佐中学校
二年　安東セア

「どうしてそこを曲がったの」ある雨の日、自転車で登校中の私は曲がり角ですべってしまい、膝に大きな怪我をしました。転倒した場所を母に伝えると、そう聞かれたのです。通学路としては、家を出てすぐの所を一か所曲がって直進すると、学校に到着します。しかし、転倒した場所は、そことは違う曲がり角でした。私は説明しました。「あの道は歩道に車が止まっていて、多い時は二、三台あるから歩道が通れない。そのまま真っ直ぐ行くと車道に出ないといけない。だからあの道を曲がったの」と。それを聞いた瞬間、母はいらだち始めました。「歩道を駐車場代わりにしていいはずがない。ましてや子どもたちが通る歩道がどうしてそんな事になっているの」と言い、車が止まっている地区の区長さんへ相談してくれました。「車はずいぶん前から停まっていて、何度か本人にも注意しているが全く改善されない。だから地区から警察に相談する事も考えた。しかし警察に相談する場合、名前と住所を言わないと受け付けてもらえない。地区名ではなく個人名が必要になるため、その情報が漏れて逆恨みされるかもしれない事を考えるとそれもできない。」という話だったそうです。この話を聞いて私は一つの疑問を持ちました。「どうして大人になるにつれて、人に注意する事ができなくなるのだろうか。」

実は私自身もそうなのです。小学生の頃は間違っている人に注意することは正しい事だと教わりました。注意される立場の時は、いけない事なんだと気づかせてくれたことに感謝していました。でも今、中学生になった私は人へ注意する事をためらいます。小学生の頃はできていたのになぜだろう。小学生から中学生へ成長していく間に、私はたくさんの人と関わり色んな考え方がある事を学びました。注意する人に対して、威張っている、偉そうにと思う人がいる、注意したことで落ち込む人がいる。「注意しなくては。」という場面でそんな事を考えると正直、「めんどくさい。」という言葉が先に頭をよぎります。「私が言わなくても誰か言ってくれるだろう。」と人任せにしているところもあるかもしれません。「嫌われたくないし。」

私はバドミントンをしています。コーチが以前こんな事を言っていました。「みんなから嫌われているキャプテンのいるチームは強いチームだ。」すごく衝撃的だったのを覚えています。コーチは続けました。「キャプテンは厳しくて、苦しい練習をあえて組まないといけない。みんなをまとめるためには自ら悪役にならないといけない。」私はその時、初めてこれまでのキャプテンの気持ちが分かりました。それと同時にドキッとしました。

夏の大会が終わると三年生は引退します。私たち二年生が最年長となり、誰かがキャプテンを引き継ぎます。それは同時に誰かが嫌われ者になるということでもあります。それがもし私だったら、嫌われ者になれるのかーそして先日、私はキャプテンになったのです。私は入部が遅くバドミントンの経験歴は二年生の中で一番短いです。そんな私が技術や経験が上の人を引っ張っていくことはとても難しい事です。それでも私は強くなりたい、絆のある強いチームにしたい、そのためには「嫌われても構わない。」という覚悟が必要です。厳しく声をかける。人任せにしていた注意も自分からする。みんなに対して言いづらい事も言う。大きな志と勇気を持って悪役を演じきってみせます。

あなたは嫌われ者になれますか。みんなのために社会のためにと、あえて悪役を演じてくれている人。大人にも嫌われ者のキャプテンは世界中にいるはずです。だからきっと世界もいいチームになるでしょう。あの時の膝の怪我を見るたびにそう思います。

優良賞

「人によって態度を変える」

別府市立別府西中学校
三年　伊藤　凛

「人によって態度を変える」突然ですが、みなさんはこの言葉に良いイメージを持ちますか。それとも良くないイメージを持ちますか。今、この言葉に多くの人が良くないイメージを持っているのではないかと思います。

日常を過ごしていく上で、私はさまざまな顔を持った「自分」を使い分けています。家と学校での異なる「自分」、学校の中でも甘えられる人、支えてあげようと思う人、苦手な人、先生など、それぞれの人や場所に合わせた「自分」がいます。そんな私ですが、小学生のときに同級生の人から言われた

「凛って人によって態度変えすぎだよね」

という言葉が今でも心に深く刺さっています。私を軽蔑の対象として捉えている、そう思わせるような冷たい目で放たれた一言。私が人によって態度を変えていることを自覚したのは、このときが初めてでした。その日から、どうすればこの自分の良くない点を直せるのか何度も考えました。ですが、直すことはできず、自分は性格が悪いんだ、おかしいんだと思い、自分のことが嫌いになりました。ただ、少し立ち止まって考えてみると、この「人によって態度を変える」という行為は、本当に良くないことなのかという疑問が湧いてきました。

思いかえしてみると、家庭や学校で「人によって態度を変える」という行為は、良くないこととして教えられてきたように思います。私もそう教えられてきたので、頭ではよく理解しているつもりです。それでも、私は相手によって「自分」を使いわけてしまうのです。いわば、私の中で「自分」を使いわけるという行為は当たり前で、習慣化されているのです。では、なぜ習慣化されているのか。それには、私の性格が関係しています。私は、もともと気を遣いすぎてしまう性格です。そんな性格が故に、小さい頃からただ人に話しかけるだけでも、「この人にはあんな感じで話しかけよう」「あの人は、こんな話をしてはいけなかったな」というようにさまざまな「自分」の中から、相手を傷つけないようにその人に合わせた「自分」を探し、整理をつけて話してきました。そのため、人によって態度を変えようと意識しなくても、「人によって態度を変える」という行為に繋がってしまっていたのです。私の性格のために、いつもしている行為が相手にとって「良くない」と捉えられてしまったのでしょう。そして、このような経緯であの一言が放たれたのだろうと今になって思うのです。

「人によって態度を変える」という行為は、先程挙げたように人に良くないイメージを持たれてしまう要因の一つでもあります。ですが、これは社会人として世に出ていったときに大切なことではないでしょうか。社会人になると、相手側の会社、お客さん、同僚、上司、他にもたくさんの立場の人がいて、それぞれにさまざまな対応が求められます。普段から「人によって態度を変える」という行為をしている私。それをプラスに考えると、その場に合わせた対応ができるということになります。いつもその状況に合わせて、さまざまな顔の「自分」を使い分けている。これは、なにか早急な対応が求められたときでも、その状況に合わせた「自分」を使い分けることができるということでもあります。つまり、「人によって態度を変える」という行為は、少し言い方を変えてみると、「その人のことを考えた対応ができる」「臨機応変な対応ができる」ということにもなると思うのです。

小学生のときに初めて自覚し、何度直そうとしても直せなかった私の「人によって態度を変える」という行為。私は、そのような自分の一面と自分のことが嫌いになるくらいまで何年も向き合い続けました。だからこそ、この自分の一面をそこまで悲観する必要はないと思えるようになりました。「人によって態度を変える」という行為の奥。私はそこに、相手への思いやりや相手を傷つけたくないという気づかいが隠れていると思うのです。

優良賞

後悔するか、挑戦するか

大分県立大分豊府中学校
三年　黒木心晴

「やらぬ後悔よりやって後悔」という言葉を私は今、大切にしています。私に足りないもの、それはあと一歩の勇気です。そして毎回「挑戦してみればよかった」「逃げてしまったな」と後悔します。

私は、小学生のころから「少しだけ挑戦」を選んできました。例えば、クラス長ならするけれど、児童会長はしないといった具合です。中学二年生までは、何もしない人より断然良いと考えていましたが、その意識を変えてくれた二人がいます。

中学二年生の三学期、私にとって五度目の体験である生徒会役員選出が行われました。私自身、心ではやってみようかなと迷っても、なってしまえば全校の前に立つ機会が増えるからと勇気を出せませんでした。そんな中、私のクラスから生徒会長に立候補したのが、勉強や部活を共に頑張っている仲の良い友だちでした。彼女は、当時クラス長を務めていてクラスメイトからの信頼も厚く、立候補したその姿はとても堂々としていました。一緒に帰宅した際、

「全校の前での選挙演説は緊張するけど、挑戦してみる！」

と言い、応援演説すら買って出れなかった自分はどこか恥ずかしく置いていかれたような気持ちになりました。

その日、私のお母さんがかけてくれた言葉こそ「やらぬ後悔よりやって後悔」です。この言葉が私の心に深く刺さりました。生徒会役員も、挑戦できたはずなのに迷っただけで結局何もしていません。それで少しでも後悔するなら、失敗していいからやってみて後悔すればいいということを強く考えさせられました。

次の日から私の意識は変わりました。中高一貫校である良さを活かし、中学生と高校生が議論する行事でのことです。その代表に選んでいただいた当日は、少しネガティブに捉えていました。しかし、チャンスをもらったんだからやるだけやってみようと思い直し、中学生からのまとめの言葉も買って出ました。当日はもちろん緊張したけれど、何より自分の経験を一つ重ねることができました。勇気を出せるか、出せないか、結果的に自分の心が明るくなるのはその一歩を踏み出したときだと実感しました。

先日も、私は一つ、勇気を出して行動しました。バスでお年寄りの方に席をゆずった、それだけです。けれど他の誰も声をかけず、その方は

「ありがとう。助かるよ。」

ととても喜んでくださいました。たった一言の勇気だけれど、今までの私なら断られることを恐れて声をかけられずにまた後悔していたと思います。私自身も嬉しい気持ちになれました。

誰だって何かに「挑戦」したり、「勇気」を出して行動したりするのは簡単ではありません。私自身、今でも不安や心配が勝って、声を上げられないことが多々あります。しかし、それで「後悔」するくらいなら「挑戦」を選ぶべきです。

中学三年生の私には、これからたくさんのことを「選択」する機会があると思います。そんなとき自分から、大変な道を選べる人になりたいです。どんなにささいなことでも、「やらぬ後悔よりやって後悔」だから。

優良賞

「継がれる命」

九重町立ここのえ緑陽中学校
二年　髙橋　遼

「思い出や大切なものができると、死ぬのが怖くなくなるんだよ。」
それは、曾祖母の葬式の帰り道、車の中で僕が質問した
「どうして大人の人はいつか死んでしまうのに死ぬのを恐れないの？」
という質問に対しての父の答えでした。
僕はその答えを聞いたとき、「ありえない」と思いました。なぜなら僕は、いつか自分が死んでしまう、大切な人と離れてしまうと考えた時、怖くてしかたがなかったからです。ところが、僕の思いとは違って、父や母は、「大切なものを守れるなら、死ぬことはまったく怖くないよ。」と言いました。また、祖父や祖母は、「死んだ後も、みんなを見守っていくよ。」と言いました。しかし、家族の話を聞いても僕は納得できませんでした。
僕にとって大切なものは、自分の命と家族です。僕が生まれてからこれまでの出来事は、全て命があったからこそ体験できたことです。そして家族は、自分を支えてくれるかけがえのない存在です。大切なものがあるから、そのために生きたいと思うし、死ぬことが怖くないと思えなかったのです。
ところがその僕の考えを変える出来事がありました。
昨年、合唱コンクールの全校合唱で「いのちの歌」を歌うことになりました。初めて聞いたときからいいな、と思っていた曲だったので、やる気満々で歌っていました。また、この曲が感謝を伝えるために作られたということを知り、部活でみんなを引っ張ってくれたキャプテンや、金賞をとるために一緒に練習したクラスの友だちを思い浮かべながら歌いました。
本番で、みんなの声が重なって、しみじみいい歌だなあ、と思って歌っていたその時、――いつかは誰でもこの星にさよならをする時が来るけれど命は継がれてゆく――このフレーズのところで、ふと浮かんだ光景がありました。「行ってくるね」という僕の言葉に笑顔で学校に送り出してくれる母。勉強のことで悩んでいると「がんばれ」と励ましてくれる父。ごくごく普通の僕の日常の風景です。同時に、カルタ取りや植物の名前、お祭りのお面の由来など、小さいころに祖母や曾祖母が教えてくれたことが思い出されたのです。
この歌に込められている感謝は、いつもの生活の中にもあるのだということ、そして、曾祖母との思い出を通して父や母が言っていた「大切なもの」がすとんと僕の中に落ちた気がしました。
命には役割があると思います。生きている間、家族や親友、恋人など、たくさんの人と出会って、一緒の時間を過ごし、かけがえのない思い出をつくることができます。そして死は「いつか」この時間を止めることです。しかし、その「いつか」は、いつどこでどんなときにやってくるのか、誰にもわかりません。でも、だからこそ人は、一日一日を大切に過ごしているのではないでしょうか。
命の役割について考えるまで、何気なく「普通の一日・平和な一日」を過ごしてきました。でも、これらのことを考えるようになってからは、一日一日というあたりまえの毎日が、愛おしく思えるようになりました。いつか死を迎えて止まってしまう時間を、失う、怖いこととらえるのではなく、「大切なもの」をたくさん生み出す時間として、毎日を大切にしていきたいです。
「いのちの歌」にあるように、人は誰も永遠に生きることはできないけれど、その人との思い出、生きた証はリレーのバトンのように誰かに受け継がれてゆきます。曾祖母、祖父母、父母、僕、そして僕につながる人に。

優良賞

「ありがとう」と伝えたくて

竹田市立緑ヶ丘中学校
三年　山村隆文

「ありがとう」この五文字を伝えればよかったと思うことはありますか。それが、二度と伝えることができない言葉だとしたらどうしますか。

例えば、あなたが授業中に鉛筆を落としたとして、その鉛筆を隣の席の友達が拾ってくれた時に「ありがとう」と友達に伝えるとします。この一言によって、気持ちが友達に伝わります。しかし、その反対を考えてみると鉛筆を拾ってくれたのに何も伝えなかった時拾ってくれた隣の席の友達はどう思うでしょうか。私がその友達の立場なら今の行動は、間違っていたのかな、それとも、拾うのが当然なのかなと思ってしまうのではないかと思います。このように、五文字の言葉を伝えると伝えないのでは、天と地ほどの差があるのではないでしょうか。しかし、私はわかっていながらも「ありがとう」という言葉を伝えられなかったことがあります。

私には、祖父がいた。祖父は、自分の住んでいる町には、住んでおらず車で約一時間かかる少し遠い場所に住んでいて、とても大好きだった。小さい頃からとてもお世話になっていて、とても大好きだった。だが、約四か月前に亡くなってしまった。

私は、日本で産まれておらず三歳になって日本に帰ってきた。日本語がわからない私にとても優しくよりそってくれた。毎回祖父に会いに行く度、楽しくて楽しくて仕方がなかった。私が「電車が見たい」と言ったら電車を見に行かせてくれて、「図鑑を買いたい」と言えば、図鑑を買ってくれるなどたくさんの願いを叶えてくれた。遊びに行く度、お菓子も用意してくれていた。だが、私にとって何よりも印象に残っていることは、真剣に夢中になって甲冑を制作していた時の祖父の姿だ。採寸をする時、一ミリもずらさないという気持ちがとても伝わってきた。一つの甲冑を制作するのに一ミリでも採寸がずれたら本物の甲冑はできないと言っていたのを今でも覚えている。毎回毎回、私たちが行く度に喜ばせてくれた。

亡くなると思っていなかった六か月前、行事のついでに祖父の家によった。その時もお菓子などたくさんの物を用意してくれていた。今でも信じることができないが、その時が祖父と椅子に座り向かい合って話した最後の日だった。それから一か月後、病院に祖父が入院したという報告が一緒に住んでいる祖母からきた。祖父は心臓の病気を患っていた。特に心配は、ないだろうと勝手に思っていた。だが、亡くなる一週間前体調が急変した。寿命約三日と伝えられ祖母の看護のもと家に帰っていた。お見舞いに行ったが、祖父の姿は想像を絶する物だった。それから毎日お見舞いに行った。話すことが難しいのに私と話してくれた。亡くなる一日前それが祖父と話せた最後の日だった。その時、祖父は力を振り絞り「すまんな」や「いつも遠くからごめんな」などたくさんのことを伝えてくれた。その時私は、「ありがとう」と伝えたかったが、涙が止まらず伝えたかったことを伝えることができなかった。翌日祖父は息をひきとった。

私は、あの日からずっと後悔している。あの時なぜ「ありがとう」と伝えなかったのかを。祖父と過ごした日々は何にも勝らず計り知れないのに。私は、自分が何気なく過ごしている日常は、何が起こってもおかしくないと改めて思った。だからこそ、大きなことでも些細なことでも、これからはたくさんの感謝を伝えていきたい。こんなことを二度と繰り返さず、祖父との思い出を胸に、私の人生を悔いなく生きるために。

あなたが日々、生活の中でお世話になっている人はいますか。その人に感謝を伝えたことがありますか。当たり前と感じている日々もいつ終わってしまうかわかりません。だから、一度で良いから恥ずかしがらず、泣いても良いから感謝を伝えてみてください。たった五文字の「ありがとう」だけで思いは伝わります。そのひと言だけでも伝えることができたら、たとえこの場所に相手がいなくても心は繋がりあえている証拠なのではないでしょうか。

内閣総理大臣賞

私が歩む夢への道

鳥取県　米子市立東山中学校
三年　矢曳未来

私は障がいを持っている障がい者だ。生まれつきではなく、六年前に交通事故に遭ったことで後遺症が残ってしまったのだ。事故後のショックで歩けなくなった。記憶力が低下した。集中力が続かなくなり、些細なことで疲れて怒りっぽくなった。私はその後遺症を負ったことで、できないことが増えた。生活に関する不自由、勉強に関する不自由、その他色々なことで前の自分のほうが良かったと思う。最近は怒りの気持ちより、悲しみの気持ちが増えたように思う。

私には二つ上の姉がいる。私は今、中学校三年生だから、高校進学を考えたときに真っ先に頭に浮かんだのは姉だった。姉と同じ高校に行きたいと思った。けれど、それはとても難しい選択だと知っていた。私には障がいがあり、姉とは違うからだ。障がいを負ったことで、勉強に集中して取り組むことが難しくなり、できることよりできないことが増えた私に高校進学なんてできるだろうかと考えた。今は自分の体の状態が少しずつわかってきたからこそ言えることだが、私には普通校進学は難しいのだろうと考えている。けれど、前は変わった自分を受け入れたくなかった。やれば私はできる。元のように戻れると考えていた。そう思って中学校に通ってきたが、今となってはそれも難しいということを知った。大きくなるにつれ、自分の体がわかってきたからだ。自分を知るというのは、辛いことなのかもしれない。私は、そのことを理解したときから、なんだか体の力が抜けて悲しくなった。私は、もしかしたら小学校から中学校に上がるとき、事故に遭う前の自分に戻りたくて、姉と同じ東山中学校を選んだのかもしれない。

そんな理由で選んだ中学校だけど私は今、その選択をして良かった、幸せだと思う。なぜなら中学校に通っていると、先生たちが私を本当に大切にしてくれているということがわかるからだ。それは、私が今、何よりも欲している気持ちだ。また、中学校に通うことで、同級生と一緒に勉強をすることができた。勉強だけではなく、色々なことに挑戦させてもらえた。委員会活動や応援団に参加することができた。そしてこの三年間を通して、私は全てが全て融通が効くわけではないということも知ることができた。

私は大人になったら、支援学校や支援学級の教師になりたい。中学校の先生達が私を大切にしてくれているように、私も教師になったら、支援学校や支援学級の子供達を大切にしたい。生まれつきの障がいがあったり、体が不自由で普通校には通えなかったりする子供達に「あなた達には居場所がある、一人ではない」ということを知ってもらいたい。そのために私は自分を見つめ、自分にできることを探していきたい。だから私は、高校は養護学校に行きたい。養護学校で自分の可能性を見つけ、自分にできること、誰かの役に立てることを探していきたい。

私は最初からこのような考えを持っていたわけではない。最近になってやっと「できない自分」を受け入れられるようになってきたのだ。小さい頃から頑固で、これだと決めれば、周りの人の言うことなんて聞かなかった。だから事故に遭って同年代の人達より、できないことが増えたということが、ものすごくコンプレックスだった。

けれど、もうそれは過去の話だ。今の私はこうなのだから仕方がない。この考えは、自分はできないと諦めたのではなく、自分を認めたのだ。私は、私なりの道を歩むことを願う。私は自分の歩幅でゆっくりゆっくり「私の夢」を叶えようと思う。目的地へ時間をかけて進んでゆくカタツムリのように。私の夢はどこまでも続いていく。

講評

審査委員長
垂井　美千代

猛暑が続いた七月八月、異常気象や全国的に多発・大規模化する自然災害に悩まされた時期でもありました。少年の主張大分県大会はこの四年間も関係者の熱意と可能な限りの感染防止対策のもと継続され、第四十五回を迎えられました。本日一四八七名の中から一次二次審査を経て選ばれた二年生二名三年生八名、十名の代表の方の主張をお聞きしました。

まず全員の内容に共通するものとして、日々の生活の中で気づいたことに目を向け、人との関わり、場所や時間・出来事との関わり、学んだことや感動を通して改めて命の重さ・周りの人々への感謝を確かめていく姿、中学生らしい視線でよりよい未来づくりのために今の自分が考えられること・必要なこと・具体的な行動として取り組めることを考え主張されました。それぞれの実体験に基づく論理的な主張には現実の課題を誠実に分析・理解し、改善の方向を探る真剣さ・確かさがあり、すでに社会を担う一員としての自覚・責任が感じられました。自分をしっかり見つめながら時に反省をし、新たな生き方をことばにまとめ、熱意を込めて発表されたお一人お一人は、若々しさ・誠実さ・頼もしさそのもので審査員一同深い感銘を覚えました。

○さあ挑戦者へ、勇気ある行動ができるようにと意識して過ごす心の変化が伝わってきます。後悔から学んできた。学んだことを活かせばいい。きっと勇気になり、自信になっていく。気づけば周りの誰かもきっと勇気の芽を膨らませています。

○暮らしていく場所・時・人、そして文化や習慣に合わせることも必要。でもそれ以上にそれぞれの違いを知り認めあい、繋がり合うことで生まれる「みんなの笑顔・信頼」この優しさこそ、これからの日本社会のマナーでありたいと願います。

○食品ロス、今や日本中の世界中の課題になりつつあります。具体例や確かな数字、そして実効性のある行動力。きっとアフガニスタンにも世界中にも届き、子どもたちが笑顔になっていくことでしょう。

○「ありがとう」はきっと伝わっています。「ありがとう」はいつでもどこでも心のいのちを支え繋ぐ言葉だと思います。これからもこの五文字を伝え合う家庭・学校・社会・世界をつくっていきましょう。

○自分の心を見つめ悩み続けてきた日々。ちょっと考え方を変えて行き着いた先が、実は人として社会人としての優しい対応力なのだと、自分を肯定できるようになりましたね。「臨機応変」その通りだと思います。

○嫌われるのは、実は私も避けたいです。でも、時にあえて「志を持って自ら努力する姿」の嫌われ者こそが、世界を繋ぐキャプテンになる。考え方の変化は間違いなくあなたの成長そのもの、しっかり受けとめました。

○いのちのバトンという言葉もあります。大切な人との思い出は、生きていく限り心の支えとして、時にいのちの見守り役として受け継がれていくのだと思います。どうぞ、いつも歌ってあげてください。

○あなたの全てを支え・見守ってくださる家族がいる。仲間たちや地域の方々がいる。そして先生のことばがある。頻繁に訪れる「病み期」は想像を絶するものがあり、ほんとうに大変なのでしょうが、いつもネどこでもネ「あなたは決して一人ではない。」

○コンプレックスの殻を抜けた今、姉は生き方の最高のライバル・尊敬する人です。そして「自分は自分」として努力も挑戦も楽しむ生き方を見つけました。仲良し姉妹の弾む会話、助手席から聞こえてくるような気がします。

○舞台に立ち、ライトを浴び、憧れの村上あやめさんになりきった姿。もう引っ込み思案はどこにもない。未来への決意が言葉以上のきらめきで伝わってきます。拍手を送ります。

すでに感じていらっしゃるであろう少子化への不安や不満・社会批判はどこにもなく、本当に清々しい発表でした。文章構成力・演題の工夫・熱意を込めての発表態度、いずれも日頃の学習の成果が感じられました。ご指導に当たられた先生方、労は報われました。会場の皆様、関係者の皆様にも心から感謝を申し上げます。皆さん、命が大切にされる社会そして「ありがとう」で繋がり合う世界をともに作っていきましょう。十名の方々が本日の貴重な体験をもとに大きく羽ばたき、伸びていく日々を描きながら講評とさせていただきます。ありがとうございました。

講評

中学生審査委員長
日田市立津江中学校
二年　内間心春

十人の発表者の皆さん、とてもすばらしい発表をありがとうございました。どの発表も、自分の伝えたいことが伝わるすばらしいものでした。

それでは、共感賞を発表します。中学生審査委員七名で慎重に審査した結果、共感賞は「Ｂｅｍｙｓｅｌｆ」という演題で発表した臼杵市立南中学校の佐藤有咲さんに決定しました。

審査委員七人で話し合い、共感した気持ちを伝え合いました。その感想をお伝えして講評にしたいと思います。

佐藤さんの主張の中で私たちも全員兄弟がいるので、つい兄弟と自分を比べてしまう気持ちはとてもよく分かりました。私にも姉がいて、その姉がなんでもできるので姉をうらやましいと思ってしまうことがあるのですが、佐藤さんのように姉をライバルだと思えるようになりたいと思いました。自分らしく輝いて胸を張って頑張れる、そんな心のあり方を教えてくれてありがとうございました。

他の皆さんの発表にも多くの共感を得ることができ、また、たくさんのことを学ばせてもらいました。大変ありがとうございました。

佳作入選作品

●好きは無限大　生き方は自由	足立　京子	豊後大野市立清川中学校三年
●「私の宝物」	井澤　那奈	臼杵市立北中学校三年
●受けいれられるように	江口　祥平	宇佐市立安心院中学校三年
●「未来を守るために」	衛藤　志萌佳	玖珠町立くす星翔中学校二年
●「大分の宝」	遠藤　章翔	別府市立別府西中学校三年
●地域に誇れ、愛される学校に	大槻　柊一郎	臼杵市立東中学校三年
●私の木の家	奥村　佳苗	日田市立津江中学校二年
●「食べ物の値段の上昇に対する思い」	片野　凪	別府市立別府西中学校三年
●「名乗る」ということ	嘉藤　花	豊後大野市立緒方中学校二年
●猫も一つしかない大事な命	河野　夏心	豊後高田市立田染中学校二年
●給食サイコー大好き	高田　夏菜	大分市立碩田学園八年
●傍観者ではなく当事者に	田原　莉桜	臼杵市立北中学校三年
●学んでこそわかる、防災の目標	寺島　大稀	佐伯市立佐伯南中学校三年
●どんな時も笑顔で	日隈　沙恵	玖珠町立くす星翔中学校二年
●みんなが幸せな場所	姫野　桃子	竹田市立直入中学校二年
●これからの防災	藤原　伊吹	佐伯市立佐伯南中学校三年
●相手を思いやることの大切さ	堀　奈菜未	宇佐市立西部中学校一年
●昔からの私の悩み	三原　妃織	佐伯市立佐伯南中学校三年

大会のようす

垂井審査委員長による講評

中学生審査委員から
共感賞を授与

玖珠町立くす星翔中学校
吹奏楽部による演奏

審査委員会

最優秀賞を受賞した平井さくらさんの発表

少年の主張県大会

平井さん最優秀賞

最優秀賞に選ばれた、くす星翔中の平井さくらさん＝31日、玖珠町

県内の中学生による「少年の主張県大会」が31日、玖珠町岩室のくすまちメルサンホールであった。最優秀賞に平井さくらさん（玖珠町くす星翔3年）の「好きなことにまっすぐに」が選ばれた。

県青少年育成県民会議と国立青少年教育振興機構の主催。45回目の今回は23校から1487人の応募があった。2次審査を通過した10人が会場で発表。臼杵市の垂井美千代市政アドバイザーら5人が審査した。

平井さんは小学生から続けているミュージカルに対する熱い思いを率直に伝え、栄冠をつかんだ。県代表として九州ブロック大会に進む。

その他の審査結果は次の通り。

▽優秀賞　今口花怜（竹田市竹田3年）北口愛（別府市北部3年）▽優良賞　安東セア（宇佐市宇佐2年）伊藤澪（別府市別府西3年）黒木心晴（県立大分豊府3年）佐藤有咲（臼杵市南3年）高橋遼（九重町ここのえ緑陽2年）前田葵衣（宇佐市長洲3年）山村隆文（竹田市緑ケ丘3年）▽県教育長賞　前田葵衣▽共感賞　佐藤有咲（宮家大輔）

大分合同新聞　令和５年９月１日（金）掲載

令和五年度（第四十五回）「少年の主張大分県大会」実施要綱

一　目　的　中学生が日常生活等で考えていることを広く社会に訴える機会を提供することにより、広い視野と柔軟な発想や創造性を養い、物事を論理的に考える力や豊かな表現力などを身につけさせ成長を促すとともに、青少年の健全な育成に対する県民の理解と関心を深める。

二　主　催　大分県青少年育成県民会議・独立行政法人国立青少年教育振興機構

三　共　催　大分県・大分県教育委員会

四　後　援　玖珠町・玖珠町教育委員会・玖珠町青少年健全育成協議会・大分県市町村教育委員会連合会・大分県中学校長会・大分県中学校文化連盟・大分県教職員組合・大分県ＰＴＡ連合会・大分合同新聞社・ＮＨＫ大分放送局・ＯＢＳ大分放送・ＴＯＳテレビ大分・ＯＡＢ大分朝日放送・エフエム大分・J:COM 大分ケーブルテレコム

五　応募対象　県内の国・公・私立の中学校、義務教育学校及び特別支援学校中学部に在籍する生徒（国籍不問）

六　開催日　令和五年八月三十一日（木）　十三時三十分～十六時三十分

七　開催場所　くすまちメルサンホール

八　実施内容

①発表内容

ア　社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など。

イ　家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友達との関わりなど。

ウ　テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など。

右記のような内容で、心からの思いや考えたこと、感銘を受けたことなどについて、少年らしい自由かつユニークな発想で、飾り気のない言葉を使ってまとめたもの。

②発表時間　一人五分程度とし、日本語で発表できること。

③発表者　審査の結果、選出された十名

④表　彰　県大会発表者の中から、最優秀賞（一名）、優秀賞（二名）、優良賞（七名）に賞状と副賞（盾等）を贈呈。特別賞として大分県教育長賞（一名）、共感賞（一名）に賞状と副賞（盾等）を贈呈。また、佳作受賞者には、県大会終了後賞状を贈呈。

⑤全国大会　最優秀賞受賞者は、独立行政法人国立青少年教育振興機構が主催し、令和五年十一月十二日に東京都で開催される「少年の主張全国大会」に大分県代表として参加する。さらに、事前の審査で九州ブロック代表（二名）に選出された場合は、全国大会に出場し、発表する。

九　問合せ先　大分県青少年育成県民会議事務局（大分県生活環境部私学振興・青少年課内）
〒八七〇－八五〇一　大分市大手町三丁目一番一号
電話　〇九七－五〇六－三〇八〇

「少年の主張大分県大会」審査基準

【最優秀賞・優秀賞・優良賞】

次の四項目について各項目ごとに審査（採点）し、その合計得点（審査委員一名あたり五十点満点×五名＝二百五十点満点）を基に協議し、各賞を決定する。

①論旨（二十点）

・自己の意見・希望など論旨が一貫していて、明瞭であるか。

・批評でなく、自らが現状を改善していく姿勢が出ているか。

・中学生らしい新鮮な発想や柔軟な創造性があるか。

②構成（十点）

・感動や共感を与える内容の濃さや構成の工夫があるか。

・体験談等の主観的要素と広い視野等の客観的要素のバランスは良いか。

③表現・話し方（十点）

・ことばが明瞭で、聞き取りやすいか。

・論旨や伝えたいことを上手に表現できているか。

・感情や感性が伝わる抑揚があるか。（演技過剰や棒読みではないか）

・話し方に熱意や迫力が感じ取れるか。

④発表態度（十点）

・少年少女の代表にふさわしい品位があるか。

・制限時間を守り、かつ時間を有効に使えていたか。

・聴衆を向いて話せているか。（原稿を演台に置くのは許可している）

【県教育長賞】

前述の審査基準とは別に、審査委員からみて「特に中学生として独創的な意見、新鮮な意見」を発表したものに授与する。他の賞との重複受賞も可とする。

【共感賞】

中学生審査委員が、「最も共感した」ものに授与する。

他の賞との重複受賞も可とする。

選考経過

事項	実施日	場所	審査委員	審査状況	摘要
一次審査	六月二十七日～七月五日	各教育事務所等	各教育事務所の指導主事等	管内応募者の中から五名以内を選考した。	各中学校で校内選考を行い、各市町村教育委員会を通じて各教育事務所に提出した。
二次審査	七月十八日	県庁内会議室	大分県青少年育成県民会議　副会長　荒金　淳 大分合同新聞社　地域報道部長　木本　崇 大分県中学校国語教育研究会　会長　小野　寛也 大分県教育庁義務教育課　指導主事　瀧口　忍	一次審査を経た応募者の中から県大会出場者十名を選考した。	各審査委員が事前に評価し、審査会で協議して選考した。
県大会	八月三十一日	くすまちメルサンホール	《審査委員》 臼杵市　市政アドバイザー　垂井美千代 大分県青少年育成県民会議　副会長　荒金　淳 大分合同新聞社　地域報道部長　木本　崇 大分県教育庁　日田教育事務所長　川邊　一寛 大分県生活環境部　私学振興・青少年課長　松原　弘之 《中学生審査委員》 日田市立津江中学校　二年 内間　心春、奥村　佳苗、川津　彩愛、嶋﨑　愛、清水　和玖、信岡　玲、松上　日なた	審査委員が発表者十名の中から、最優秀賞一名、優秀賞二名、優良賞七名を決定した。また、特別賞として、審査委員が大分県教育長賞一名を、中学生審査委員が共感賞一名を決定した。	出場者十名の発表の後、表彰式を行い、各受賞者に賞状と副賞を贈呈した。

大分県青少年育成県民会議

大分県青少年育成県民会議
〒870-8501　大分市大手町3丁目1番1号
大分県生活環境部私学振興・青少年課内
TEL（097）506-3080